

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所
〒259-1293 平塚市土屋 2946
神奈川大学湘南ひらつかキャンパス
Tel. 0463-59-4111 (内 2200)

銀輪

大橋 哲

我知らず、すーっとものにひきつけられるとき、何故そうだったのか後で考えてみると、潜在意識のどこかにその答えはあるのかもしれない。その時私があの自転車に歩み寄ったのは、自分の一番遠い記憶のかけらである父との一こまが関与していたのだと思う。今から50年以上前、逆算すると当時未だ30代後半だった父は、幼い私を「オバチャン」に預けるために、通勤途中に2キロほど離れた彼女の家まで自転車で運ぶのが日課であった。それが「ノウリツ号」という名前だったことは、ずっと後になって物置の奥で粗大ごみと化したそのフレームに名前がついているのを見て知った。自転車の原型ともいえる形状で、今のものと比べたら無骨で角ばった、むやみに重い鉄のかたまりみたいな物体だったと思う。そのハンドルのバーに引っ掛けるようにして、たしか青いペンキで塗られた小さな鉄製の補助席を取り付けたあと、私を抱きかかえてその座席に滑りこませながら、「いいか、さとし、ぜったいここに手を出すんじゃないよ」と父が言う。ハンドルのところには、ブレーキをかけると、それと連動する鉄の爪のようなものが二つ付いていて、それに小さな手を挟まれたら大怪我になりそうな危険な仕組みで、私はその部品をじっと見つめている。

記憶の片隅に眠っていたノウリツ号がそれに重なったのかもしれない。私は茶色く錆びこけたその一台の自転車に、どこか懐かしさを覚えて歩み寄った。2012年の夏、マレーシアでの留学プログラム開発のため、初めてクアラルンプール中央駅に降り立ったのは、午前8時前だった。日本人と見れば必ず不当に高額を請求する運転手ばかりと聞いていたタクシーを避けて、空港からシャトル列車に乗った私は、いつになっても明けない夜が不安になり、時差の計算を間違えているのかななどと思いながら何度も時計を確かめていた。カリキュラム改革の一環としてマレーシアのプログラム開発を提案しているくせに、実は私は東南アジアのこ

とをほとんど知らず、ようやく車窓に異国の風景が現れだしたころにも、赤道付近では一年中夜明けが7時ころになるということに考えが及ばなかった。ホテルのチェックイン時間までしばらく時間を潰すために、駅から一番近い観光施設と知って訪れたのが、国立博物館であった。未だ他の見学者は誰もおらず、清掃員の人たちが微笑みかけてくれる中、一番乗りで入館した。その古ぼけた自転車はそこにあった。

昭和16年12月8日、真珠湾攻撃に先立つこと1時間20分、イギリス植民地シンガポールの攻略を目指した日本軍は、マレー半島東海岸タイ国境付近に位置するコタバルに上陸した後、その地を防衛するイギリス軍を敗走させ、歩兵たちはゴムやヤシ林の間を縫う舗装された道を南部に向けて自転車で急進撃した。熱帯の路面にタイヤは焼け焦げ、鉄だけの車輪が戦車のような音を立てて走ったと言う。この時の日本軍を「銀輪部隊」と呼ぶことを後に知った。展示物の説明を読むうちに、ノウリツ号の懐かしさは不安に変わっていた。その不安は、数日後に訪問した現地の大学の文化祭において、広島原爆投下のシーンをバックにして演じられた歴史劇の中で、残虐な日本兵を演じる学生たちを目にして更に強まった。

その後学生派遣を8回行い、1年間のマレーシア留学経験者は150人を超えた。その間、入国関係やら学生生活関係の問題が次々と発生して、マレーシアという国が非効率なせいだなどと嘆いたことも数知れない。ただ、その度に力を貸してくれるのもマレーシア人であり、そのおかげで学生は大きく成長して帰国する。5年間で引率等でのマレーシア訪問は既に20回に達したが、訪問の度にマレーシア人の底知れない寛容さと優しさを痛感しないことは無い。深い思いやりがあり大らかな人たち。たぶん、彼らのあたたかさこそが、あの国に感じる懐かしさの本当の理由なのだろう。

(所員/おおはし・さとし)

高校時代の学習習慣と大学での1年間

浅海 典子

新しいカリキュラムのスタートに合わせて、経営学部学修調査が始まりました。「国経研だより」でも「カレッジ・インパクトと新入生の期待」と題して、調査の主旨とご協力をお願いを掲載していただきました(2014 年第 43 号)。経営学部生の学業、学内外での活動などの全般的な経験が、成績、キャリア計画、大学生活への満足度などどのような影響を与えるかを継続的に調査し、経営学部での学びが学生の発達をどのように促すかを明らかにする取り組みです。

それに先立ち、2011 年第 27 号では「大学生の OJT と学びの習慣」として、大学教育の貨幣的な効果に関する研究をご紹介します。矢野真和(2009)「教育と労働と社会—教育効果の視点から」『日本労働研究雑誌』No.588 は工学部の卒業生調査によって、大学時代の学習・読書の蓄積と継続がその後の学習や読書を支え、その成果が所得の上昇になって現れることを実証しています。矢野はこの仕組みを「学び習慣」仮説と呼びました。

私は長く民間企業で働いてきたので、経営学部の学生にどのようなサラリーマンになってほしいかをよく考えます。仕事に行き詰った時、思うような成果が得られない時、とりあえず気のおけない友人に愚痴をこぼしてストレス解消する。それはそれでよいのですが、翌日には書店に立ち寄って、何かヒントになる本を見つけて手に取ってほしい。できれば大学での授業を思い出して、もう一度経営学を学んでほしい。そんなことを考えています。

大学で、どのように学習習慣を身につけさせるかを考えるとき、大学入学以前の学習習慣が気になります。経営学部学修調査では、「1 年生アンケート」で回答した高校時代の学習時間と「2 年生アンケート」の結果について考察しています。高校時代の「宿題や予習復習・試験勉強など、授業に関する勉強」の時間が、一週間に「ほぼ 0 時間」「1~2 時間」「3 時間以上」の 3 グループに分け、大学 1 年次の学業への取り組みや大学生活への満足度を比較しました。詳しいデータは『2016 年度経営学部学修調査~2 年生アンケート~調査報告書』をご覧ください。

予想どおり、高校時代の学習習慣は大学入学後も継続しています。高校時代の勉強時間が週に 3 時間以上の学生は、大学でのレポート作成にかかる時間と定期試

験の勉強時間が長く、外国語の宿題や予習復習の時間、外国語以外の予習復習や授業に係る読書の時間も長くなっています。授業に係らない本を読む時間も長く、さらに 1 年次に資格取得の勉強に力を入れたと答えています。

高校時代の学習習慣は、教員への相談や学内のサポート利用の行動にも関係しています。高校時代の勉強時間が長い学生の方が教員からアドバイスを得ており、とくに履修科目の選び方や勉強、学生生活、留学、資格取得などについて教員に相談しています。また、図書館、学生課、パソコン室、書店、dot Campus、などの学内の施設やサポートの利用率は、高校での勉強時間がほぼ 0 時間の学生がとくに低く、1~2 時間の学生、3 時間以上の学生と大きな差があります。学習習慣の不足は、学習環境の利用と適応に悪影響を与えるようです。

さらに高校時代の学習習慣は、学びへの興味も引き出しています。勉強時間が長い学生ほど、1 年次におもしろかったと思う科目数が多く、1 年次の授業で「学問の基礎を学んだ」と答えています。FYS で学んだことについては、図書館の利用方法、文章・レポートの書き方、プレゼンテーションの方法など、いずれも勉強時間の長い学生のほうが「学んだ」とする率が高くなりました。注目したいのは「大学で学ぶことの意味」であり、勉強時間がほぼ 0 時間の学生と 3 時間以上の学生の回答率には、大きな差がありました。学習習慣は単に継続するだけでなく、学ぶことが自分に何をもたらすかを考えることに繋がると考えられます。

その結果、高校時代の勉強時間の長い学生ほど修得単位数が多く、GPA が高くなっています。さらに、大学で親しい友人ができた、アルバイトが楽しい、先生からアドバイスや指導が得られたとしており、学業成績だけでなく人間関係づくりもうまくいっているようです。

総合的な満足度についても、勉強時間が長い学生の方が、1 年次には不満であっても 2 年次には満足に転じる率が若干高くなっています。

さて、スマホから顔を上げ、本や PC に向かわせるには。前工程の責を問うのではなく、自信をもって次工程へ送り出したいものです。

(所員/あさみ・のりこ)

オサキマツシロ

鳥居 徳敏



スペイン語との出会いは大学生の時だった。ただ工科系の単科大学では第二外国語はドイツ語しかない。しかし、あの何とも明るく、そして陽気に見える中南米に魅了され、憧れの地への大旅行を目的に中南米クラブ作り、スペイン語の勉強を始めた。当時は大学以外で他言語を学ぶことは容易ではない。カトリック教会の神父さんに強引に頼み込み、週 1 回の授業を教会堂で受けることになった。残念ながら、中南米行のスポンサーが見つからず、夢はいつの間にか潰えた。

中学時代の 1960 年代初め、東京オリンピックを控え、建設業界は大盛況、ボーナスが 20 か月とか、30 か月とかと今では考えられない時代だった。そこで工業高校建築科への進学を決心した。できるだけ早く金儲けをしたい、言うまでもない。順める時期になったのか、これで働けるのの解決策が大学への受験用準備などは全ルマを果たしての工った。そして 3 年目、育反対、産学共同反なり、教授陣と対峙下火になり、就職を再び何も学んでいなさりとて教授陣を糾けにもいかない。幸うになった哲人建築在があった。彼のとせてもらえず、専らう風評は伝わっていた。



マドリードの我が住まい(右側ビル4F)

という欲望からであることは調に高3になり、就職先を決だが、自分は何を勉強したのかと大いに不安になる。唯一進学だった。工業高校だから、くなされない。浪人というノ業大学建築学科への進学にな今度は学園紛争。マスプロ教対などと学科闘争会議議長とすることになる。この闘争も決めなければなくなった時期、いという大問題に直面する。弾した人間が大学院に進むわい、当時やっとう理解できるよ家白井晟一(1905-83)の存ころなら、直ぐには仕事をさレタリングの勉強のみだとい師への弟子入りを勝手に決め

込む。それから6か月、様々な偶然の末、夜の10時に始まった面談の機会を得る。

「その若さで建築をやると決めたのなら、外国で遊んできたらどうだ」と師は言う。これは師がその師の哲学者から言われた言葉であり、これに従い5年間ドイツ留学をしているのだ。「語学は駄目」と反論しながらも、「そう言えば、スペイン語なら」と言ってしまった。日本人にとっての発音のし易さがこの返答になった。「それはいい、スペインの建築はイタリアやフランスにない柔らかさがある。スペインに行ったらどうだ」と勧められる。それから4年後の1973年から84年にわたるスペイン遊学が、2000年から本学でのスペイン語教育という想定外の道に導くことになった。

(所員／とりい・とくとし)

■□■ 事務局からのお知らせ ■□■

- 2017年度研究プロジェクト募集について
 <客員研究員 新規・継続手続き>
 期限：3月13日(月)まで
 提出先：国際経営研究所
- <共同研究プロジェクト募集>
 提出先：国際経営研究所
 期限：3月17日(金)まで
 ※期限厳守でお願いします

- 『国際経営フォーラム 27号』を刊行しました。ご寄稿いただきました皆様ならびに関係者各位に感謝申し上げます。

今回、ご無理を言って3月にご退職される鳥居教授にご寄稿いただきました。先生の思いが溢れる、素敵なコラム有り難うございました。(行川)

私の専門分野

大庭 絵里

私の専門は社会学である。これまで、何度も何度もそう書いてきているのに、今も、「心理学」と間違われる。

2017 年度演習 I・II (大庭担当) を申し込んできた学生に、私のゼミを選んだ理由を尋ねた。学生は「心理学を学びたいから」と答えた。私の専門は心理学ではないと言っても、要項に書いてあったと引き下がらない。では、もう一度要項をよく読んで、それでも私のゼミに入りたいなら、志望動機を書き直して翌日来るようにと言って帰らせた。

私が心理学を教えているなどと、どうやったらそんな間違いを起こせるのだろう。しかし、これは、文章をよく読まない学生に限ったことではない。「神大の先生」を読んだという方々 (本学の教員も含む!) も同様なのである。

社会学と心理学との間には、深い溝がある。全く異なる学問分野である。しかし、それらを専門としない研究者や「一般人」にとっては、同じようにみえるのかもしれない。

さらに私にとって打撃となるのは、私が専門としているのが「犯罪心理学」であるという、とんでもない間違いである。

「神大の先生」では私の専門について「社会学 (逸脱・犯罪・少年非行、メディア)」と記載されており、その他の自己紹介文では、たいてい、「逸脱・社会問題の社会、犯罪社会学」などと私は書いている。この「犯罪」という言葉から連想されるのが「犯罪心理学」なのではないかと思う。

大きな犯罪事件が報道されると、「犯罪心理学」の専門家という人々のコメントが紙面やTV画面にあらわれる。推理小説、犯罪をテーマとする映画やTVドラマでは、犯罪心理分析官、あるいはプロファイラーなどという専門家が登場して活躍している。そのほとんどが虚構であるのに、心理学を学んだ専門家が犯罪を解明するというイメージが人々に強くたたきつけられるのだろう。

そもそも、日本社会が「心理学化」して久しい。「自分探し」がはやり、若者は「心」の中をさぐるとする。大学も心理学科には受験生の人気が集まる。心理学を研究したところで自分の心の悩みは解決されないのに。さらに、マス・メディアでは、犯罪とされる行為や、「わけのわからない」行為については、「心理」による説明が求められている。

このような社会のあり様こそ、「社会学」の研究対象なのである。私たち、社会学に身を置く者は、「心理」で人の行動を説明はしない。

このように叫んでみたところで、社会学の人気度はあまりないし、「社会学部」や「社会学科」を別名称へ変更、あるいは改組する大学も少なくない。まして、「犯罪社会学」の知名度がきわめて低いことくらいは、私も認識している。しかし、「逸脱論」というよりは世間的に「通りが良い」と思って、私は自己紹介にはその名称を使っている。

実は、私の専門領域は、犯罪社会学の中でも周辺的なところに位置している。私の関心は、秩序と統制のメカニズム。特にメディアにおける犯罪・非行の社会的構築。私が依拠する学術的視点では、犯罪とは、人と人との間の、あるいは様々な諸機関の間の相互行為を経てカテゴリー化される社会的構築物である。

現在の日本社会においては、犯罪に対する厳罰志向が強い一方で、刑事司法手続についての知識が一般の人々に伝わっていないこと、「犯罪」を犯したとされる人々の社会復帰が困難であることなど、考えるべき事が多くある。

犯罪への理解とは、ある意味で、異文化の他者への理解でもある。そのような観点から書いた拙稿が、経営学部が誇る国際教育担当の教員たち (専任・非常勤含む) が主に執筆した本に収められた。『大学生のための異文化・国際理解—差異と多様性への誘い』(高城玲編著、丸善出版) は、来年度、本学部の学生たちが複数の科目において読むことになる本である。この場を借りて、皆様にもお薦めしたい。

「本書は、文化人類学による異文化理解の視点と国際関係論を主とした国際理解の視点を軸にするだけでなく、社会学、民俗学、地域研究、美術史などの他の学問分野の視点も合せた多角的・複眼的な視座も重視」している (丸善出版ニュース 2017/01/23 より)。

そう。私は、「心理学」ではなく、「社会学」を専門としている。

(所員/おおば・えり)

研究余滴

編集後記

第 52 号をお届けします。大橋先生、大庭先生、浅海先生に執筆をお願いしました。そして鳥居先生は 3 月を持ってご退職されます。この季節は、新と旧の交替の時期、バトンタッチです。このように人と人が繋がることによって、様々なことが伝えられ、伝統が築かれていくのでしょう。私もこの号で編集作業が終了となり、次の方にバトンタッチです。原稿の依頼を快く引き受けていただいた先生方ありがとうございます。(I)